

性の画一的社会化に抗して —セクシャリティの多様性とイギリスでの実践—

高橋 さえみ (国際関係学科・学生)



はじめに

2023年9月から2024年6月まで、大学を一年休学してイギリスに留学し、ジェンダーやセクシュアリティなどに関する社会学を、現地の実情にも触れながら、深く学ぶことができた。この学びを通して、自分の中で当たり前と思っていた考えや価値観を根本から見つめ直す機会が生まれ、新しい視点を得ることができた。また、現地の関連団体での活動を通じて、イギリスの先進的な取り組みの魅力や多様なアプローチに触れ、大きな刺激を受けた。さらに、卒業論文では、セクシュアリティの中でもアセクシャルと日本の教育について研究をしており、今回の留学経験は自分の研究にとっても貴重な糧となった。

セクシャリティについて

セクシャリティとは、人間の性的な魅力、行動、アイデンティティなど、性に関するさまざまな側面を指す概念だ。生物学的な性別や社会的な性別と必ずしも一致するものではなく、異性愛、同性愛、両性愛、無性愛、クィアなど、幅広いスペクトラムの中で自認される。



写真1:社会学部の教授と生徒一部(筆者友人撮影)

セクシャリティには社会的・文化的な影響が反映されており、個人の経験や社会の価値観に応じて多様な形で表現される。そのため、セクシャリティは単なる性行動や性的指向にとどまらず、自己の認識や社会との関わり方など、個人のアイデンティティに深く関わる重要な要素となる(Zevallos, 2014)。

「社会化」とは

社会化 (Socialization)とは、社会に適応し、期待される行動を身につける過程のことを指す。人は、日常生活、メディア、教育などを通じて、性別や性のあり方に基づいた社会の期待

や役割を学ぶ。例えば、男性であれば「男性的」とされる見た目や生き方、性の表現が求められ、それに沿わない場合、いじめや差別、社会的排除を経験することがある。

「社会化」される過程では、異性愛や恋愛が中心的で優れたものであるという社会的な規範が強く影響してくると考えられる。



写真2:多様なジェンダーセクシャリティの本(筆者撮影)

社会化の過程で、異性愛や恋愛が「当たり前」とされ、性的マイノリティや非性的アイデンティティは周縁化される(Robinson, 2016)。また、ロマンティック・イデオロギーによって、恋愛や結婚が幸福の基盤とされ、他の関係よりも重視される価値観が形成される(Gupta, 2015)。そのため、恋愛以外の関係や結婚しない選択が軽視され、自分も無意識にその基準に沿った生き方を求められるようになる。

女性の地位委員会への参加

3月にニューヨークの国連本部で開催された「女性の地位委員会 CSW 第68回」にオンラインで参加し、UN Women(国連女性機関)のイギリス支部メンバーとして会議を傍聴する機会に恵まれた。この貴重な体験を通じて、ユース世代や女性が国連会議に参加し、学ぶことの素晴らしさを実感した。



写真3:CSW68 Delegateのプロフィール写真

そして現在、来年度の模擬国連世界大会で CSW の議場に
参加する大使のメンターを務めており、留学中に得た学びがこ
の活動に繋がっていることを心から嬉しく感じている。

“Pride in London”パレードの意義

ロンドンのプライドパレードにボランティアスタッフとして参加し、
LGBTQ+コミュニティの人々だけでなく、街の多くの人々が一
堂に会する光景に強く心を打たれた。子どもからお年寄りまで、
多様なアイデンティティを持つ人々がフレンドリーに集まり、共
に祝い、支え合う場が作られていることが印象的であった。

プライドパレードは、LGBTQ+コミュニティとその支持者が性的
多様性を公に支援し、社会での認知、受容、評価を目指す
世界的なイベントである。1969 年のストーンウォール暴動を記
念する形で始まり、多くの国や都市で毎年開催されている。し
かし、イギリスでは依然として LGBTQ+への反感や偏見が根強
く、反 LGBTQ+ヘイトクライムや包括教育への抗議が続いてい
る。2019 年の調査では、国民の 3 分の 1 が同性愛関係に不
快感を示しており、これらは 1980 年代の HIV 危機や「セクシ
ョン 28」の影響を反映していると考えられている。

それでも、プライドパレードの特徴は、参加者が同じ場で身
体的に共有された活動を行うことで、集団として強い感情を体
験できる点にある。この「感動」は、個人が深く内面的に感じ
ると同時に、多様な人々に広く共有され、単一のアイデンティ
ティを共有しなくても共通の関心や目標を通じて生み出される。
その結果、LGBTQ+を含む多様なアイデンティティの人々が深
い感情的なつながりや一体感を得られる場となる。



写真 4: パレードでのアセクシャルの団体 (筆者撮影)

Undergraduate Student Conference

学内の学会で「日本の家庭内に残る男女差別」をテーマに発
表した際、日本ではまだ少ない分野であるにもかかわらず、教
授や大学のサポートを受けて学生の声を発信できたことに大き
な魅力を感じた。英語でアカデミックな内容を発表し、評価を
得る貴重な経験となった。

神戸市外大では、ジェンダーやセクシャリティ分野の卒論や

研究が増えているものの、その広がりはまだ十分ではないと感
じており、英語で研究発表や意見交換を行う場を来年 (2025 年)
の 1 月に企画している。重要な社会問題について私たちの声
を上げ、意識を高める貴重な機会となり、キャンパス内での包
括的な学びの場につながることを願っている。



写真 5: 学内で研究発表 (筆者友人撮影)

代わりに

HIV や同性愛への偏見はまだ根強く存在するが、もしそれ
が大切な人や自分自身の問題だったらどうだろうか。セクシャ
リティは一人一人異なるスペクトラムであり、性のあり方は決して
一つではない。変わらない人もいれば、時間や状況で変化する
人もいる。性的指向、性自認、性表現は、単純な二分法では
語れない多様性を持ち、それぞれが唯一無二の個性を形作っ
ている。私たちの価値観や固定観念はどこから生まれたのだろ
うか。「当たり前」と思い込んでいたことを疑い、問い直す。その
一歩が、偏見を超えた真の理解と共感への道を切り開くと考え
る。

主要な参照・参考文献

- 相澤真一ほか, (2023). 『これからの教育社会学』.
柳淳也. (2023). 「NPO のミッション・ドリフトに抵抗する周縁化
された主体: LGBTQ プライドパレード組織の事例分析」『組
織科学』, 56(3).
Day, Chris Robson (2022). “The Rainbow Connection:
Disrupting Background Affect, Overcoming Barriers and
Emergent Emotional Collectives at “Pride in London.”” *The
British Journal of Sociology*, 73(1).
Gupta, Kristina (2015). “Compulsory Sexuality: Evaluating an
Emerging Concept”. *Signs: Journal of Women in Culture and
Society*, 41(1)..
Robinson, Brandon Andrew. (2016). “Heteronormativity and
Homonormativity”. *The Wiley Blackwell Encyclopedia of
Gender and Sexuality Studies*.
Zevallos, Zuleyka. (2014, November 28). “Sociology of
Gender”. *The Other Sociologist*. Retrieved
from <https://othersociologist.com/sociology-of-gender/>